# ヘーゲルによる「自然哲学」の改訂

## ――その哲学体系における「数学」の抹消――

加藤尚武

ヘーゲルは『エンツュクロペディー』を、二回改訂している。初版（A版と表記）と二版の違いが大きく、二版（B版と表記）と三版（C版と表記）の違いは比較的少ない。その改訂が、どのような意味をもつか。体系としての完成度の高まりを示しているか。時代による外部からの影響の跡が著しいか。思想的な深まりを示しているか。理論的な失策を撤回したり、糊塗しているか。それとも実質的な意味をもたない表現の改訂に留まっているか。――そういった吟味が必要である。

本稿では、論理学、自然哲学、精神哲学という三部から成る『エンツュクロペディー』の自然哲学の冒頭の一部分（A195～A205）について、初版と二版（三版）の違いに着目する。違いには、ほんのわずかな単語の入れ替えから、基本となる枠組みを変えた跡までさまざまの差異相がある。やがては研究が進展して、あらゆる差異について個別的に分析がなされるだろうが、まずは大鉈を振るって二版でざっくりと削除されてしまった部分に目を向ける。[1] 直観的な印象から言うと、二版で削除された部分には、表現は素朴ではあるが駆け引きや欺瞞のない正直な思索の跡が見えて、ヘーゲル哲学を大枠でプラトン主義として捉えるか、新プラトン主義として捉えるかという解釈[2]を下すための重要な手がかりとなるように思われる。

## 1　数学の不在

初版Aでは自然哲学全体が、第一部数学、第二部非有機体の物理学、第三部有機体の物理学と構成され、その内の第二部非有機体の物理学が1 機械論（Mechanik）、2 元素物理学、3 個体物理学（本来の物理学）[3]と分れていた。二版（三版）では、第一部が機械論（Mechanik）となって初版Aにあった「数学」が消え、第二部物理学、第三部有機的物理学となる。簡単にいうと、数学－非有機体－有機体という構成から、機械論（Mechanik）－物理学－有機体という構成に変わる。核心的な部分だけを取り出せば、数学が機械論（Mechanik）に変わった。これによってヘーゲルの自然哲学から永遠に「数学」という見出しが消えてしまう。[4]

初版Aでは全体の構成は普遍、特殊、個別という枠組みにしたがって次のように説明されていた。「理念としての自然は、1 空間と時間としての普遍的、観念的、中心のない状態（Aussersichseyn 自己外存在）、2 実在的な相互にばらばらな状態（das reelle Aussereinander 相互外在態）、特殊的で物質的な現存在、すなわち非有機的自然（unorganische Natur）、3 生きた現実性、有機的自然である。三つの学はしたがって、数学（Mathematik）、物理学（Physik）、生理学（Physiologie）である。」（A196T. A版一九六節本文。以下同様に表記。――Hegel Saemtliche Werke hrsg. von Hermann Glockner Bd. 6 S. 150、以下ではGL6. S. 150のように表記。）[5]

1 数学（Mathematik）では、実体性のない点としての空間と時間を扱い、2 物理学では実在的粒子としての非有機物を扱い、3 生理学では有機体を扱うというのが、この節（A196T）の要旨である。

空間と時間の特徴を「中心のない状態」（Aussersichseyn 自己外存在）と呼ぶのは、ヘーゲル独自の存在論の文脈による。存在そのものを、自分の中心が自分の内にあるもの（たとえば太陽の中心は太陽の内にある）と、自分の中心が自分の内にないもの（たとえば月は、その回転の中心が地球にある）とに分ける。Aussersichseyn（自己外存在）とは、文字通りに解釈すれば「自己の外にある存在」だが、「その存在の集約点・統合の中心になるものが、その存在の外部

にある存在」という意味である。たとえば奴隷の存在の中心は主人である。(6)

「いま」という言葉は「いま」と言ったときにはもう「いま」ではないという特徴をもつ。「いま」が時間帯の一点であるとすると、その一点を特定する根拠となる「いま」の意味は、その一点にはない。だから「いま」は「自己外存在」である。「いま」は「Aであることにおいて Aでない存在」という意味で、「自己外存在」ということができる。

――空間と時間が自己外存在であるから「数学」に属するというのが、初版Aの立場で、二版以降では、同じ理由で「機械学」に属すると見なされる。機械学が、その初版Aでは「物理学」(Physik) という項目のなかに繰り込まれていた (A206〜A217) が、その部分のテキストは二版B・三版Cでほとんど削除 (注1を参照) されている。

二版B・三版Cになると自然哲学全体の構成が、普遍・特殊・個別という枠組みから離れて、形式と内容の分離、形式の内在、形式と内容の統合という枠組みで、書き変えられる。

「第一部　自然としての理念は、第一に、相互にばらばらな状態 (Aussereinander)、無限の個別化 (die unendliche Vereinzelung) という規定の中にある。この規定の外部に、形式の統一がある。この統一は、観念的な、もともと自体的にしか存在しない (nur an sich seiende) もので、したがって単に求められている (daher nur gesuchte ist) にすぎない形式である。[統一のない] 物質とその [外在的な統一の] 観念的な体系 [が並立する]。それが機械論 (Mechanik) である。

第二部　自然としての理念は　第二に、特殊性という規定の中にある。すると実在性は、内在的な形式規定で措定され、この現存する差別に即して措定されて (an ihr existierender Differenz gesetzt) いる。これが反省的関係である。この関係の内部中心 (Insichsein 自己内存在) が自然の個体性である。――それが物理学 (Physik) である。

第三部　自然としての理念は　第三に、主体性という規定の中にある。この規定のなかでは、形式の実在的な区別は同時に観念的な統一に (ebenso zur ideellen Einheit) 引き戻されている。自己自身を見出し、単独で (fuer sich 対自的)

存在する観念的な統一に引き戻されている。――それが有機学（Organik）である。」（C252T. B版の字句を改訂。）

このように構成が変わったために、初版Aだけに通用する構成の説明をした次の節が二版Bで削除される。

「重いものとしての物質は、せいぜい内在的に存在する、すなわち普遍的物質（die in sich seyende, oder allgemeine Materie）である。この意味での物質は機械論（Mechanik）[7]の対象である。しかし、この概念は自己を特殊化しなくてはならない。そうなると物質は元素的な物質であり、元素物理学の対象である。この特殊的な物質は個別性へと集約されて、個体化された物質（die individualisirte Materie）となる。本来の物体世界の物理学の対象である。（A205T. Gl6 S. 163）

文意の概略はつぎのようになるだろう。もっとも抽象的な規定である「重さ」というレベルだけで物質をとらえると、それがどのような本質を持つかはすべて隠れて内在的に存在していることになる。これがもっとも広い意味での物質で、機械論（Mechanik）の対象である。しかし、この内に隠れた本質が、特殊化されて発現すると、地水風火というような元素としての物質になる。元素が、集約されて個物となると匂いや味のような性質をもつ本来の物質となる。――

初版で「数学」という見出しに含まれていたA197からA203までの内容は、空間と時間であるが、「機械論」（Mechanik）という見出しのもとにおかれたBC254からBC261までの内容とまったくと言っていいほど変わらない。だから「数学」という見出しが用いられていた初版においても、実質的には数学はヘーゲルの体系に不在だったと言える。

実は、ヘーゲルの論理学にも、精神哲学にも「数学」や「幾何学」という見出しは不在である。もちろん「論理学」には「量」という項目があり、存在の量的規定についての考察が示されている。しかし、このことは数学も幾何学も存在の規定としてしか扱わないと言うヘーゲルの姿勢を示している。[8]さらに言えば、このことはア・プリオリの法則性、カテゴリー、時間、空間など、西洋の思想史では、数学的なものと同じ次元に置かれ、経験的なものや質料的なものと異なる次元に置かれると言う意味での通俗的プラトン主義、もしくはカント的二世界論と、新プラトン主義の「一者」

モチーフをスピノザを下敷きにして「体系」化したヘーゲル哲学の体質が根本的に相容れないものであるということを示唆しているように思われる。

## 2　空間と時間の同一性

これから引用するのは、空間と時間が物質に転化するという論述である。

「空間と時間は、絶対的（an und fuer sich）に理念（die Idee）をなしている。空間は実在的もしくは直接的客観的な側面であり、時間は純粋に主観的な側面である。」（A203T1. Raum und Zeit machen an und fuer sich die Idee aus, jener die reelle oder unmittelbar objective, diese die rein subjective Seite. BCにこの文章そのものは不在だが、BC258A2に類似の表現がある。）――時間と空間は実在的直接的客観的な空間と観念的抽象的主観的な時間とが一つのまとまった観念になっているものであるという趣旨である。

ここで「絶対的（an und fuer sich）に」というのは、「即自」（an sich）かつ「対自」（fuer sich）という意味ではない。「即自」（an sich）という意味は否定できないが、「対自」（fuer sich）という意味がなりたたない。時間と空間は、「根源的に同一存在の規定である」という意味において「絶対的（an und fuer sich）に」理念を形づくる。

この文章で空間と時間が、どのような関係になっているかは、かなり重要な問題である。二つの並行する文章が存在すると解釈すると、「空間は、絶対的に理念である」なおかつ「時間は絶対的に理念である」という意味になる。この解釈を、斥ける根拠はこの文面だけからでは分からない。しかし、後の方の文章から逆算すると「空間と時間は、一対でまさに理念である」と解釈できると思われる。というのは空間と時間の相互移行ということがすぐ後で語られるからである。

これに続く文章が問題のひとつの焦点である。「空間は、それ自身のなかで没交渉の相互にばらばらなあり方（Aus-

einanderseyn）と区別のない連続性という矛盾である。そのために自己自身の純粋な否定性（die reine Negativitaet seiner selbst）であり、時間への移行（das Uebergehen in die Zeit）である。空間は場所の個別性となる。」（A203T2.）

文意を通俗的に説明すれば、空間は、相互にばらばらでべったりだから、時間に移行するということである。普通に考えると、空間が時間に移行するとか、空間には時間への移行が含まれるとかいうことはあり得ないように思われる。ヘーゲルは、時間も空間も同じ形態だから、同一だと言っているように見える。「ダイヤモンドも一粒、灰も一粒、ゆえにダイヤモンドは灰である」とはいえないはずである。存在の様相が同一であることから、存在そのものの同一を論ずる誤謬推理ではないかという疑いがかかる。

「空間は、それ自身のなかで没交渉の相互にばらばらなあり方（Auseinanderseyn）と区別のない連続性という矛盾である」というのは、「空間は、その内在的な本性として、砂のように没交渉の相互にばらばらなあり方（Auseinanderseyn）と、一衣帯水、べったりとした区別のない連続性という矛盾である」ということである。砂のように相互にばらばらで、水のようにつながっている。この点で、時間と同じだとヘーゲルは言いたい。

いま分かりやすく「砂のように相互にばらばら」と述べたが、実は砂は最後の一粒になると、それ以上は分割できない点である。[9] ヘーゲルの言う「相互にばらばらなあり方」（Auseinanderseyn）というのは、どこまで細かく見ても、最後の粒子には還元できないという意味である。粒子であるなら、それは自分以外の粒子を自分から排除している。ところがこの「相互にばらばらなあり方」（Auseinanderseyn）は、「二つのものが互いに互いの外にある。同様にしてすべての二つのものが互いの外にあるような全体としてのあり方」という意味である。砂粒の一つに注目するとどの一粒もまた、相互にばらばらで、どこまで細かく見ても相互にばらばらなのである。そのために「自己自身の純粋な否定性」（die reine Negativitaet seiner selbst）であるという表現につながる。

「自己自身の純粋な否定性」（die reine Negativitaet seiner selbst）という言葉は、もっと徹底した自己否定を表現して

いる。自分はAであることによってAではないというあり方を示している。

砂粒ならば、それを指して「自己自身の純粋な否定性」とは言わない。砂粒は単独で、まとまりがあり、他の粒子を排除して、存在し続けるからである。しかし、砂ならぬ空間のなかの点を切り出せば、いつも自己同一が流れてしまう。「ここ」と言って、絶対的な場所を特定しようとすると、どこでも「ここ」なので特定できない。どこの「ここ」も「もはや絶対的なここ」ではない。「自己自身の純粋な否定性」というのは、自我＝自我のような連続的な同一性がなりたたないという意味である。「ここだ」と言ったときにはもう「ここ」ではない。だから「いま」と言ったときにはもう「いま」ではない時間と同じだとヘーゲルはいう。

「同様にして、時間もまた、その一つに集められた対立する契機（in Eins zusammengehaltene entgegengesetzte Momente）が直接的に止揚されてしまうのであるから、無差別への直接的な墜落である。つまり、区別された相互にばらばらな状態（相互外在）つまり空間に墜落する。空間の場所は、まさにその場所で直接的にその規定性に対して相互に端的に没交渉なものとして別物になる。」（A203T3.）

存在の様相が同一であることから、存在そのものの同一を論ずる誤謬推理ではないかというわれわれの疑いはますます強まる。

まず引用文の文意はつぎのように解釈されるだろう。

時間において、それを構成する対立的な契機が一者に集約されていた。しかし、その一つに集められた対立する契機が、集約されたとたんに、集約されることそのものによって、直ちに解体されて無差別になってしまう。つまり、区別された相互にばらばらな状態（相互外在）におちいるので、時間（いま）が空間（ここ）になる。空間の場所（ここ）は、まさに「ここ」と指定されることで直ちにその指定された内容・規定性に対して無関係になってしまう。相互に端的に没交渉な相互にばらばらな点のひとつになる。「ここ」はもはや別物で、最初の「ここ」ではなくなってしまう。

ヘーゲルは、たしかに「Aと規定されることでAでなくなってしまう存在」というモデルに魅了されている。そういう存在が現存するのか、それともそういうモデルそのものが一種の思考実験であるのかということを考えようとはしない。そういうモデルに還元可能であるということから、時間と空間の相互転換というイメージに到達する。

「時間のなかで空間が消滅したり再生産されたりする。空間のなかで時間が消滅したり再生産されたりする。これが運動である。これは生成であるが、しかし、それ自身また直接的に時間と空間のそれ自身同一の統一、すなわち物質である。」(A203T4. Dies Vergehen und Wiedererzeugen des Raums in Zeit und der Zeit in Raum ist die Bewegung; — ein Werden, das aber selbst ebensosehr unmittelbar die identische daseyende Einheit beyder, die Materie, ist. BC261T3. とまったく同じ。)

この引用部分は、BとCにも実質的な変更がないので、ABC三版に共通である。ただしBC版では、この引用の前にくる文章が違っている。BC版では、空間と時間、場所を順々に論じて、それらを集約したところで運動と物質に移行する。しかし、A版のように空間と時間を分けずに論ずるという形の方が、ヘーゲルの本音を表している。

「場所は、このように空間と時間の措定された同一性である。ところで空間と時間は、それぞれそれ自身の身につけて矛盾であるが、場所はまた、差し当ってはこのような矛盾の措定されたものである。(C261T1. Der Ort, so die gesetzte Identitaet des Raumes und der Zeit, ist zunaechst ebenso der gesetzte Widerspruch, welcher der Raum und die Zeit, jedes an ihm selbst, ist.) 場所は空間的な個別性である。だからこそ［他と］無関係な個別性である。それは、ただ空間的な今としてだけ、すなわち時間としてだけ存在する。(C261T2. Der Ort ist die raeumliche, somit gleichgueltige Einzelheit und ist dies nur als raeumliches Jetzt, als Zeit.) したがって場所は、直接的にはこの場所としての自己にたいして無関係であり、自己にたいして外面的であって、自己の否定、したがって他の場所である。(so dass der Ort unmittelbar gleichgueltig

gegen sich als diesen, sich aeusserlich, die Negation seiner und ein anderer Ort ist.)」

無理な表現が含まれているが、分解すると次の九個の文になる。

1　措定された矛盾は、それぞれが身につけてもつのだが、空間と時間である。(Der gesetzte Widerspruch ist der Raum und die Zeit, jedes an ihm selbst.)

2　場所は空間と時間の措定された同一性である。(Der Ort ist die gesetzte Identitaet des Raumes und der Zeit.)

3　場所は、さしあたり、空間と時間であるところの措定された矛盾である。(Der Ort ist zunaechst ebenso der gesetzte Widerspruch, welcher der Raum und die Zeit ist.)

4　場所は、空間的個別性であり、それゆえ没交渉な個別性である。(Der Ort ist die raeumliche Einzelheit, somit gleichgueltige Einzelheit.)

5　場所は、空間的な没交渉の個別性であるが、時間としての空間的な今である。(Der Ort ist die raeumliche gleichgueltige Einzelheit nur als raeumliches Jetzt, als Zeit.)

6　場所は、この場所としての自己に直接的には没交渉である。(Der Ort ist unmittelbar gleichgueltig gegen sich als diesen Ort.)

7　場所は自らにとって外的である。(Der Ort ist sich aeusserlich.)

8　場所は自己否定である。(Der Ort ist die Negation seiner.)

9　場所は一個の別の場所である。(Der Ort ist ein anderer Ort.)

これらの文の最初の前提に当たるDer gesetzte Widerspruch ist der Raum und die Zeit, jedes an ihm selbst. という文は、

「A ist B an ihm selbst」というヘーゲルが時々使う混合文型である。たとえば「人間は理性を身につけている」(Der Mensch hat die Vernunft an ihm selbst) と言えば、人間にとって理性とは取り外しのきくものではなくて、その存在と不可分であるという意味を含んでいる。だから「人間はもともと理性である」(Der Mensch ist die Vernunft an sich) という文意が根底にあると言ってもいい。「人間は理性を根っから身につけている」(Der Mensch hat die Vernunft an sich) と言うのは「人間は理性そのものである」と誤解される余地のある不安定な表現である。ところがヘーゲルは、さらに不安定な「人間は身につけて理性である」(Der Mensch ist die Vernunft an ihm selbst) という「ist ... an ihm selbst 文型」をときどき使う。

たとえば補論 (Zusatz) の用例であるが、Der Raum ist dieser Widerspruch, Negation an ihm zu haben, aber so, dass diese Negation in gleichgueltiges Bestehen zerfaellt. (空間は否定を身につけてもつという矛盾である。しかし、この否定が無関係な存立に解体する。) (C257Z3) というのがある。

だから、ここではむしろ Der Raum ist der gesetzte Widerspruch an sich. Die Zeit ist der gesetzte Widerspruch an sich. と言いたくなるが、「措定された」(gesetzt) には、「もともと自体的に」(an sich) とは、相容れない意味内容 (わざとらしさ) が含まれている。どちらがこの場に相応しいかと言えば、「もともと自体的に」(an sich) の方である。というのは、この「矛盾」は次のように表現されているからである。「空間はそれ自身内在的に (in sich selbst)、無関係な相互にばらばらな状態と区別のない連続性との矛盾であり自己自身の純粋な否定性 (die reine Negativitaet seiner selbst) であって、さしあたり時間へ移行する。」(A203T2、C260T1.)[10] 要するにこの矛盾は空間に内在的 (in sich selbst) という規定が根底にある。この内在性が措定されるにいたったという文脈なら理解できるのだが、この論述の流れでは、そういう内在から外在的確定へという転換点を見つけることができない。

結局、「措定された」(gesetzt) には、「存在・存立の必然性が想定された」というような意味しかあてがうことがで

きない。ほとんど「上述の」というに等しい重さしかもたない。

ヘーゲルの「論述」は、「空間と時間それぞれが身につけてもつ措定された矛盾」というイメージを根底に置いて、そこから「だから場所は空間と時間の措定された同一性である」という述語を引き出し、またそこから「だから空間と時間の措定された矛盾である」という述語を引き出し、「空間的個別性」、「没交渉な個別性」、「時間としての空間的な今」、「自己に直接的には没交渉」、「自らにとって外的」、「一個の別の場所」という目標地点に到達する。これらはすべてもとになる根源的なイメージのなかに含まれているもので、呼び出されてくるさまざまな述語の順番に必然性があるわけではない。

この畳みかけを、平俗な言葉で表現すれば、こうなる。「もともと空間も時間も、不連続の連続という矛盾である。だから空間と時間が一体をなしている場所という概念は、まず空間と時間の同一性であり、ゆえに空間と時間にもちまえの矛盾であり、ゆえに無差別的な点であり、ゆえに空間的な今であり、ゆえに時間であり、ゆえに自分に没交渉であり、ゆえに自分にとって外的であり、ゆえに自己否定であり、ゆえに別の場所である。」

こういう強引なこじつけで、「この場所は、ゆえに別の場所である」という型にはめ込んでしまう。しかし、空間は本来的に三次元的であり、時間は本来的に一次元的であるから、両者は質的に異なっており、空間を一次元的なものに還元することなしに、その同一性は語れないという反論が出るだろう。(11)

### 3　合成と不可入性

ところがヘーゲルはそういう反論を前もって見透かしていたかのように、反論への反論を用意している。「観念性から実在性への移行、すなわち、抽象から具体的な現存在への移行、ここでは空間と時間から、物質として現象する実在性への移行は、悟性には理解できない。だからこの移行が悟性にとってつねに外面的なもの（immer aeusserlich）、与

えられたもの（als ein Gegebenes）となる。」（C261An1-1. 以下引用するC261An = B261An = A203Anでは段落の切り方や細かい記号の使い方などに違いはあるが、文章にはほとんど違いがない。注解Anmerkungを An と表記、以下同様。）

空間と時間という抽象的な観念性から、物質という実在性への移行が、悟性には理解できないのが当たり前だとヘーゲルは言う。ヘーゲルの文章を文字通りに解すると「この移行が悟性には、理解できない既成の事実のように思われる」という文意になるかもしれない。しかし、ヘーゲルの真意は「そこで物質が悟性にとってはつねに外面的なもの、与えられたものとなって、物質そのものが、実は観念性から実在性への統合であるという真理が悟性には見えない仕組みになっている」ということにあったのではないだろうか。悟性にとって「外的な所与」が「物質」だという解釈を採用したい。俗っぽく表現すれば、「空間と時間から物質が出てくるという移行が理解できないので悟性は物質が外的な所与だと思いこんでいる」という趣旨になる。

空間・時間という空虚な入れ物に、物質という塊が置かれているという常識的なイメージをヘーゲルは頑として受け入れない。このイメージを哲学的に表現すれば、空虚な入れ物は「無」であり、物質という塊は「有」であるという存在論になる。これを拒否する点に、ヘーゲル自然哲学のもっとも根底的な考え方が潜んでいる。

「普通の表象（die gelaeufige Vorstellung）では、空間と時間は空虚なものと（als leer）見なされる。すなわち、空間と時間を充たすものにたいして無関係なもの（gleichgueltig gegen ihre Erfuellung）である。そのくせ、空間と時間はつねに充ちているもの（doch immer als voll）と見なされ、また空虚なために外部から物質で充たされる（von aussen her mit der Materie erfuellen zu lassen）のだとされている。こうして一方では、物質的な事物を空間と時間にたいして無関係なもの（gleichgueltig gegen Raum und Zeit）と考えながら、他方では同時に、物質は本質的に空間的で時間的（wesentlich raeumlich und zeitlich）だと考えられている。」（C261A1-2）

もっと粗っぽく言えば、空間と時間は空虚であり、かつ満たされている。物質は、空間的・時間的ではないが、かつ

空間的・時間的である。これを存在と無の二元性を徹底する形で捉えるか、それともその二元性を解消することなく保存するようなモデルを設定して捉えるか。悟性は、そこまで踏み込んだ思索をしてはいない。ヘーゲルはそれを存在と無の同一性というモデルで乗り切ろうとしている。そのモデルを徹底すれば、空間と時間の転換と、そこからの物質の成立という運びになるとヘーゲルは信じている。

もしも話を逆転して、物質から空間と時間が分化して発生してくるという運びにしたらどうだろう。ヘーゲルの哲学的な論述の内容は、そういう逆転を認めてもいいような構造になっているのではないだろうか。

上の論述に続けて、物質についてヘーゲルはこう述べている。

「物質について言われていることは、（α）物質が合成されたもの（zusammengesetzt）だということである。」（C261A2-1）

「これは物質の抽象的な相互にばらばらな状態（auf ihr abstraktes Aussereinander）、すなわち空間に関係する。また物質から時間や、一般に形式という形式をすべて捨象した上で、主張されて来たことは、物質は永遠で不変であるということである。」（C261A2-2）

「実際またこれは、上のことから直接に帰結して（folgt ... unmittelbar）くる。しかしこういう物質は単に真実味のない抽象（nur ein unwahres Abstraktum）にすぎない。」（C261A2-3）

物質が合成されたもの（zusammengesetzt）だということは、ヘーゲルの視点から見れば連続的であることと相互にばらばらな状態（Aussereinander）であることという二つの側面をもつ物質から一面だけを抽象してきた見方である。すなわち空間が無限に可分的であるのと同様に物質も無限に可分的であるとする考え方である。つまり、物質から空間を抽象し、その抽象態に無限可分性を想定し、その想定された無限可分性をふたたび物質そのものの性質だと想定する。それによって物質の可分性とか合成性とかが語られているが、その内容は抽象態についての想定を物質そのものに適用

するという過ちであるにすぎない。これは「物質は永遠で不変である」という想定と同じで、物質から時間や、一般に形式という形式をすべて捨象した上で、その捨象された抽象態に成り立つことがらを物質そのものの本性だと見なしているにすぎないとヘーゲルは主張する。

こうしたヘーゲルの論述の根っこにあるのは、空間と時間とがそのあらゆる矛盾を含めて一体であるような根源的な存在である。ぶくぶく泡だって発酵状態にある原始の自然というイメージを思い浮かべてもいい。この「ぶくぶく存在」を根底に置いているヘーゲルから見ると、ガラスの箱のような空間にこちこちの金属球を置いたような悟性のイメージは真実味のない抽象（nur ein unwahres Abstraktum）にすぎないのである。

逆に言うと、無限の空間に無数の剛体の粒子が散らばっているという物質世界の根源的なイメージを哲学的に突き崩そうとしたら、どうしてもこの「ぶくぶく存在」を根底に置く事になるというのが、ヘーゲルの戦略的な判断である。あらゆる原子論を根底から否定する存在のイメージは何かという問いをヘーゲルは引き受けていたと思われる。

原子論の存在論は、物質は「不可入的」というイメージとつながっている。それについてヘーゲルは、こう述べている。「（β）物質は不可入的（undurchdringlich）で抵抗し（Widerstand leisten）、触わることができ（fuehlbar）、見ることができる（sichtbar）もの等々である。」（C261A2-4）「これらの述語が意味するのは、物質は一方では、特定の知覚にたいして（fuer die bestimmte Wahrnehmung）、一般に他者にたいして（fuer ein Anderes）存在するが、他方では単独で（fuer sich）存在するということである。」（C261A2-5）

ヘーゲルがここで述べていることをもっと親切に言えば、物質は触ることができて、なおかつ見ることができるから、「不可入的」というイメージが出来あがるのである。見ることで想定される内部に、触覚が到達できない。もしも、人間の感覚が生まれつき触覚だけで成り立っていたとする。異なる部分を同時に知覚するという経験が非常に制限される結果、同時性を要求されるような知覚が後退する。例えば縦横の比の感覚は後退して消滅するかも知れない。われわれ

は正方形と長方形の区別をしない世界に棲むことになるだろう。円と楕円も同じものと見なされる。すると奥行きの感覚は全く違ったものになるので不可入性は、物質の固さという感覚と区別がつかなくなるかも知れない。

さまざまな知覚に対して、同時的に、同一物としての異なる知覚が成立するということ、それらの知覚内容が完全に不可通約的であって、共通の要素がないということから、同一物体が視覚的に赤く、触覚的に重いというような経験が成立する。

するとある知覚にとっての存在（対他存在）と他のものとの関係のない単独の存在（対自存在）が同一であるという判断が成立する。悟性は、そこから「不可入性」という存在性質が物質に帰属するかのように思いこむ。

「この二つのことがらは、物質がまさに空間と時間との同一性として、すなわち、直接的な相互にばらばらな状態と否定性、すなわち単独的なものとして存在する個別性との同一性として持っている規定である。」（C261A2-6）

通常の悟性は「物質は合成されたもので不可入的だ」と思っている。合成と不可入という通常の悟性が認めているような物質の規定が、空間と時間の同一性、相互にばらばらな状態と単独的個別性との同一性という悟性の認めない規定から生ずるとヘーゲルはいう。悟性の捉えていることの真実が、ヘーゲルの言うとおりだとしたら、悟性は自分が捉えていることの真実を知らないということになる。

この引用文を分析すれば、物質の内在的な規定として、通常認められている二つの規定（合成性と不可入性）は、まず、空間と時間の同一性（die Identitaet des Raums und der Zeit）と見なされていることが分かる。この点についてはすでに空間と時間のそれぞれに分散と連続、多様と単一との両契機が存在するという見方が背景にあることを見てきた。

つぎに、「直接的な相互にばらばらな状態と否定性、すなわち単独的なものとして存在する個別性との同一性」（die Identitaet des unmittelbaren Aussereinander und der Negativitaet oder der als fuer sich seienden Einzelheit）の解釈が問題になるが、同一性の一方の項目は、すでにこの文脈で幾たびも登場してきたものである。他方の項目が、der Negativi-

taet oder der als fuer sich seienden Einzelheit となっているのは、極めて難解でこの「否定性」(Negativitaet) を先述の「場所は自己の否定である」(Der Ort ist die Negation seiner) と同系統の「否定」と重ね合わせにすることができない。ここでは「否定性」(Negativitaet) が、「単独的なものとして存在する個別性」(der als fuer sich seienden Einzelheit) と同格に置かれているが、そのこと自体がきわめて例外的である。というのは否定性が、単独の個体性と同格になるという文脈は、このテキストの流れにはないからである。

初版ではこの部分は「否定性すなわち生成」(der Negativitaet oder des Werden) となっていた。「いま」が「いま」と言ったとたんに、もうその「いま」ではなくなるという否定性のことで、「生成」と置き換えられるのは当然である。それをヘーゲルは、第二版Bで「単独的なものとして存在する個別性」と書き換えたのである。明らかにこの書き換えは前からの文脈の流れに背いている。

その理由は、つぎに続く文脈が反撥と牽引を導き出していくのだが、ヘーゲルは初版の文意を二版で大幅に変更しているからである。

### 4　反撥論の修正

初版でヘーゲルは反撥をつぎのようにして導き出していた。

「物質は、自分の否定性の契機、差異性もしくは相互にばらばらとなる抽象的な個別化を通じて自己自身を自己自身の内で保持する。物質は反撥をもつ。」(A204T1. Die Materie haelt sich in ihr selbst durch das Moment ihrer Negativitaet, Verschiedenheit oder abstracter Vereinzelung auseinander; sie hat Repulsion.)

これが次のように書き換えられる。

「物質は、自分の自己同一性にそむいて、否定性の契機、抽象的な個別化の契機によって、相互にばらばらな状態を

保つ。これが物質の反撥である。」(C262T1. Die Materie haelt sich gegen ihre Identitaet mit sich, durch das Moment ihrer Negativitaet, ihrer abstrakten Vereinzelung, auseinander; die Repulsion der Materie.)

共通しているのは、物質が、相互の抽象的な個別化という自分の否定性の契機を貫いて、自己保存するので、反撥が成立するという点である。自分が自分でなくなってしまう否定性を貫いて自己同一性を維持するために、他のものを排除する反撥が働くと解釈したくなる。ところが二版になると「自己自身の内で」(in ihr selbst) が削除されて、「自分の自己同一性にそむいて」(gegen ihre Identitaet mit sich) という言葉が加わる。

つまり初版では、箱入り娘が誘惑を斥けて自己同一を保つのが反撥だが、二版以降では身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれとばかりに他者と関わって自己を維持するという積極的な反撥になる。つまり否定性を発揮しながら個体性を保つという意味での「否定性」が導入されてくる。それが、「否定性すなわち生成」(der Negativitaet oder des Werden) というおとなしい表現から、「否定性すなわち単独的なものとして存在する個別性」(der Negativitaet oder der als fuer sich seienden Einzelheit) という積極的な主体性としての否定性、すなわち反撥にふさわしい否定性に書き換えられた理由であろう。

否定的統一で牽引を説明するという次の段階でも改訂が施されているが、文章を短縮しただけである。初版では「物質の相互にばらばらな状態はしかしまさにこうした差異するものが同一であると言う理由で本質的である。これはすなわちこうした相互にばらばらに存在する単独存在の否定的統一があり、それゆえ連続的だからである。」(A204T2. Ihre Aussereinander ist aber eben so wesentlich, weil diese Verschiedenen ein und dasselbe sind, die negative Einheit dieses aussereinanderseyenden Fuersichseyns, — somit continuirlich.)[12]「物質はしたがって牽引をもつ。」(A204T3. Die Materie hat daher Attraction.) 連続的だから牽引が成り立つという論旨は、二版でもまったく変わらない。「これらの差異のあるものが［それぞれ］同一のものなので、この相互にばらばらな状態で存在する単独存在の否定的統一も、本質的であ

る。こうして物質は連続的であり、これが物質の牽引である。」(C262T2. Ebenso wesentlich ist, weil diese Verschiedenen ein und dasselbe sind, die negative Einheit dieses aussereinanderseienden Fuersichseins; die Materie ist somit kontinuierlich, — ihre Attraktion.)

次の「重さ」についての記述では、記述が詳細になっている。初版では「こうした契機の統一が重さである」(A204T1. Die Einheit dieser Momente ist die Schwere.) と非常にあっさりとした記述である。さまざまの契機を集約しているのが「重さ」だという趣旨である。それが二版では詳述される。

「物質は不可分的に反撥と牽引の両者であって、これらの契機の否定的統一、すなわち個別性である。物質は、しかし、物質の直接的な相互にばらばらな状態に対抗するものとして、まだ区別されている。だから、物質は、それ自身まだ物質的なものとして措定されておらず、観念的な個別性、すなわち、中心である。——これが重さである。」(C262T3. Die Materie ist untrennbar beides und negative Einheit dieser Momente, Einzelheit, aber als gegen das unmittelbare Aussereinander der Materie noch unterschieden und darum selbst noch nicht als materiell gesetzt, ideelle Einzelheit, Mittelpunkt, — die Schwere.)

ひどく難解に見える文章だが、解釈の試案を提示しておく。

物質の中では、いつも反撥と牽引とが火花を散らしあっている。反撥は牽引なしには成り立たず、牽引は反撥なしには成り立たない。その両者は不可分である。物質は、この二つの契機の統一でありながら、いつもどちらでもないというあり方をする中心である。右に傾けば右ではないと言い、左に傾けば左ではないと言う。どこという一点を指すことはできないが、どちらでもないという仕方でどちらでもあるような統一、すなわち「否定的統一」である。

こういう形で、物質は一定の空間的規定と時間的な規定をもつ個別性である。物質は、しかし、相互にばらばらな状態に分散していくのに対抗する中心をもっていて、他の物から明確に区別されている。しかし、他の物から違いを突きつけられて、いわば他律的に自立している。物質は、それ自身まだ物質的なものとして措定（画定）されていない。その個別性は観念的な個別性、すなわち、どこかに必ず中心があるはずだという集約点であり、それが重さである。鉛の重さも金の重さも、同じ一キログラムであると言えるのは、重さが特殊化されていない物質の規定であるからだ。この論述のなかでも空間的規定と時間的な規定が物質そのものと不可分のものとして扱われている。

私は、ヘーゲルが空間・時間・物質について、存在の様相が同一であるという理由で同一の存在であるとみなす誤謬推理を犯していないか、空間と時間の質的差異（数学的次元の違い）を無視しているのではないかという疑問を出した。

存在の様相が同一である以前にすでに、空間・時間・物質は存在の変容として、同一なのである。つまりヘーゲルの論述は、様相の同一を待つまでもなく、すべての規定が存在のあり方であることに根ざしている。空間も時間も存在である。

『エンツュクロペディー』初版には見られなかった、カントの感性論への配慮が、二版（三版）には見られるが、「純粋形式」というカントの見方とは鋭く対立しているはずのヘーゲルの空間・時間論で、「形式」という概念についてのカントとの対立点が主題的に論じられていないのは、不可解でもあり、残念でもある。

空間と時間の次元が異なるという問題点に関しても、それは存在の変容として同一の存在の異なる姿であるから、相互の転換が可能になるのだと説明することができるだろう。根源一者の自己展開的変容によってすべてのものが産み出されていく。ヘーゲルが、哲学を通じて描きだそうとしていたものは、生命的な存在の自己変容というモチーフの貫徹であった。その存在の規定としての数と量は存在しても、その根源存在の外部に数学とか幾何学とかが独立の系として、別の世界、別の空間を作り出すということをヘーゲルは許さなかった。[13] それが哲学体系における「数学」の抹消の意味

するものである。

## 注

(1) 初版Aのみに存在し二版Bと三版Cで削除されたテキストはどの部分かという問いに厳密に答えることは、非常に難しい。初版のごく一部分が、二版と三版に編入されている場合が多いからである。ヘーゲル全集の厳密な校訂版はまだ刊行されていない。加藤尚武訳『自然哲学』(下) 岩波書店の付録に、各版の照合表を載せたが、かなり過ちがあることが判明した。素読して比較しただけでは誤りを排除できないので、岩波書店付録記載の「BCなし」項目(二版と三版に欠落している節)についてキイワードを選び、そのキイワードを全巻検索することで確認した。

BCなし=A205′ Koerperwelt′ Physik で確認。
BCなし=A209′ Gravitation で確認。
BCなし=A213′ BC266と関連性あるが、BCなしと認定。
BCなし=A214′ Galilei で確認。
BCなし=A215′ Stoss で確認。
BCなし=A216′ Schwerpunkt で確認。
BCなし=A217′ Sein で確認。
BCなし=A222′ Lichtkoerper で確認。
BCなし=A223′ 間違い。BC279と一致。
BCなし=A234′ Spannung で確認。
BCなし=A235′ mechanisch で確認。
BCなし=A240′ kugelnd で確認。
BCなし=A241′ Bruchgestalt で確認。

BCなし＝A242、zersprengbarで確認。
BCなし＝A243、Klangで確認。
BCなし＝A244、Zeitmomentで確認。
BCなし＝A247、abgeschlossenで確認。
BCなし＝A251、Metallitaetで確認。
BCなし＝A252、Soliditaetで確認。
BCなし＝A253、Metalle Oxideで確認。
BCなし＝A254、Feuerで確認。
BCなし＝A255、Stickstoffで確認。
BCなし＝A256、begeisteで確認。
BCなし＝A261、chemischで確認。
BCなし＝A268、Gestaltungsproで確認。
BCなし＝A269、Luftで確認。
BCなし＝A271、Entaeusserungで確認。
BCなし＝A278、Subjektivitaetで確認。

エンツュクロペディー初版（A版）すなわち、いわゆる『ハイデルベルク・エンツュクロペディー』の電子テキストは、すでに公開されている「ヘーゲル・データ・ベース」にふくまれていなかったが、ほぼ校訂が済んだので「ヘーゲル研究会」を通じて公開したいと思う。

（2）山口誠一「ヘーゲルの新プラトン主義理解」新プラトン主義協会＋水地宗明編『新プラトン主義の影響史』昭和堂、一九九八年所収を参照。

（3）初版A目次の表記と、目次の指示する本文内の見出し表記とが一致していない。目次は以下のようになっているが、テキスト

内では（　）のようになっている。

Erster Theil. Die Mathematik (Erster Theil. Die Mathematik)

Zweiter Theil. Die Physik des Unorganischen (Zweiter Theil. Die Physik)

A. Die Mechanik (A. Die Mechanik)

B. Die Elementarische Physik (B. Elementarische Physik)

a. Elementarische Koerper (a. Die elementarische Koerper)

b. Elemente (b. Die Elemente)

c. Elementarischer Process (c. Der elementarische Process)

C. Die individuelle Physik (C. Individuelle Physik)

a. Gestalt (a. Die Gestalt)

b. Besonderung der Koerper (b. Die Besonderung der Unterschiede)

c. Process der Vereinzelung (c. Der Process der Vereinzelung)

Dritter Theil. Die Physik des Organischen (Dritter Theil. Organische Physik)

A. Die geologische Natur (A. Die geologische Natur)

B. Die vegetabilische Natur (B. Die vegetabilische Natur)

C. Der thierische Organismus (C. Der thierische Organismus)

（4） Michel Wolf: Hegel und Cauchy, in "Hegels Philosophie der Natur" hrsg. von Rolf-Peter Horstmann und Michael John Petry, Klett-Cotta 1986, S. 199.「ヘーゲルの数学の哲学は（体系的には『論理学』の特定の部分、特に第一巻にあり、また『自然哲学』の冒頭の数節に含まれている）は、こうした展望からみると独自の位置を占めている」と述べて、一九世紀数学史をふまえてヘーゲルの数学論の位置づけを論ずる好論文だが、「数学」を扱うことと「存在の数的な規定」を扱うことの区別をしない、従来までの素朴な見方を示してもいる。

P. Ziche: Mathematische und naturwissenschaftliche Modelle in der Philosophie Schellings und Hegels, 1996 Frommann Holzboog は数学や物理学から採用された概念を比喩的に用いているということが、シェリングとヘーゲルの哲学の根本的な特徴となっているという視点で、きわめて詳細な資料調査をしているが、ヘーゲル哲学体系における「数学」の消滅には言及していない。

(5) 実は「生理学」(Physiologie) という表題は、この節で一回登場しただけで、目次でも、また本文の該当個所でも使われてはいない。用例としてはスパランツァーニに言及して用いられている (A287, BC366) が、これはヘーゲルが自分の言葉として用いたものではない。なお直接の関係はないが、Hans-Uwe Lammel: Physiologie und Naturphilosophie in Deutschland um 1800, in "Naturphilosophie" hrsg. von Gloy/Burger, 1993 Frommann Holzboog を参照。

(6) スピノザ『エチカ』第一部公理一「存在するものはすべて、それ自身の内にあるか、それとも他のもののうちにある。」(世界の名著、30「スピノザ　ライプニッツ」七八頁、中央公論社)

(7) Mechanik の訳語を「機械論」とするのは、日本語では通常「Mechanik」の訳語は「力学」であるが、ヘーゲルでは「力の学」という意味がまったくないからである。

(8) Louk Fleischhacker: Hegel on Mathematics and Experimental Science, in "Hegel and Newtonianism" ed. by Michael John Petry, 1993 Kluwer p. 224.「質と量を相対的対立を含むものとして扱う際に、ヘーゲルは、古代に類型的であるような数学的客観性と物理的客観性を素朴に分離することも、近代に類型的であるような同じように素朴な両者の同一視も回避している。」この筆者がいう「素朴でない関係」をどのように記述するかに依存するが、私はまずヘーゲルが素朴な同一視という地盤で、その上に対立の関係をねじ込んだと見た方が誤解が少ないと思う。

(9) Wolfgang Bonsiepen: Die Begruendung einer Naturphilosophie bei Kant, Schelling, Fries und Hegel, 1997 Vittorio Klostermann S. 520.「空間点をヘーゲルは矛盾だと考えている。それは空間点が一面では空間的ではなく、他面では空間との関係ではやはり空間的であるはずだからである。……そこでヘーゲルは流れ (Fliessen) という代わりに点が他となる (Anderswerden) とか自己の外にでる (Aussersichkommen) とか言う。」

(10) Thomas Kalenberg: Die Befreiung der Natur — Natur und Selbstbewusstsein in der Philosophie Hegels —, 1997 Felix Meiner S. 119.「時間の生成は一面では同語反復的な導出となっている。というのは空間が生成したのは、空間が時間であり、空間が精神に向けて努力しているという前提からのみ考察されているからである。」この人は比較的無批判的にヘーゲルの論述を追いかけているのだが、「同語反復的」という表現は的中していると思う。

(11) Dieter Wandschneider: Raum, Zeit, Relativitaet, 1982 Vittorio Klostermann S. 63.「空間が自体的に概念として捉えられているために、ヘーゲルの思考は概念の本性に依拠している」とのべて空間の三次元と概念の三契機との連関に触れているが、問題は概念の三契機が空間の直観的な意味での三次元と同一視できないということであろう。

(12) 原文の aussereinanderseyen den を aussereinanderseyenden と修正。

(13) M. J. Petry (hrsg.): Hegel und Naturwissenschaften, 1987 Frommann Holzboog 所収の Louis Eduard Fleischhacker: Mathematische Philosophie und Hegelsche Dialektik S. 89ff. についての討論が興味深い。たとえば Hoesle の発言「貴方の意見では数学は実在哲学のなかの特殊科学には帰属させられないで、その限りで存在者の存在を扱うことになります。……」

（筆者　かとう・ひさたけ　京都大学大学院文学研究科〔倫理学〕教授）

# THE OUTLINES OF THE MAIN ARTICLES IN THIS ISSUE

*The outline of such an article as appears in more than one number of this magazine is to be given together with the last instalment of the article.*

## Revision of Hegel's *Encyclopaedia* Disappearance of the "Mathematics" from his System

*by* Hisatake KATO
Professor of Ethics
Graduate School of Letters
Kyoto University

Hegel revised the *Encyclopaedia* of the Philosophical Science twice. In the first revision Hegel made substantial changes but the second revision was a minor one. One of the important changes in the first revision can be found at the beginning of the Philosophy of Nature, where the heading of "Mathematics" was replaced by "Mechanics." Accordingly, the body of the text was also rewritten. This, however, is not a substantial change, for although the heading was Mathematics in the original edition, Mathematics was not discussed there. The important point is that as a result there is no place for Mathematics in Hegel's system of philosophy. From the outset Hegel tried to avoid presupposing a world of ideas that lay outside the existing world. Space and time are also determinations of existence. Therefore it is possible to explain the reciprocal transformation between space and time in terms that both space and time are determinations of the existing world. The underpinning rationale is a monism of the

existing world in the sense that all the determinations are the transformations of Being.

## Faith in Christianity and religious language

*by* Sadamichi ASHINA
Associate Professor of Christian Studies
Graduate School of Letters
Kyoto University

What is faith? What is the basic structure of faith? In what kind of dynamic process does faith become real? In this paper, we aim to answer these questions in relation to christian faith.

To approach the basic structure of faith, we need the point of view where emotion, knowledge, and will can be treated integratively. Faith as being ultimately concerned is a centered act of the whole personality. If we identify faith with one of the functions which constitute the whole personality, i.e., emotion, knowledge, will, the meaning of faith is completely distorted. "Ultimate concern" that Tillich says is the terminology submitted to express the holistic structure of christian faith. In other words, faith is a conversion of intentionality in self from our habitual ego (sin) to the true ground of self (God), and the dynamics of faith is nothing else than the process of this conversion.

In what process does the conversion of self's existence become real? What we would suggest here is that this dynamics of faith can become real in a reading-process of the biblical texts. Thus, it is tried to argue the dynamics of faith by describing the reading-process of the biblical texts. It is the parable of "the good Samaritan" that is taken up. The conclusion that is obtained from the analysis of reading "the good Samaritan" is as follows. The dynamics of faith is a new formation (Gestaltung) of life in the process which consists of a series of stages from Mimesis 1 to Mimesis 3 by way of Mimesis 2 in the act of reading. In this dynamic process, knowledge, will, and emotion which are three elements of faith